紙媒体との「併用」支持が8割以上に

●中央教育研究所の「デジタル教科書調査」

中央教育研究所（谷川彰英理事長）はこのほど、小中学校の教員と子どもたちを対象にデジタル教科書への意識などを調べた「教師と児童・生徒のデジタル教科書に関する調査（その2）」の結果をまとめた。それによると、3年前の2012年調査の結果と比べて、全体的にICT（情報通信技術）への理解が進んでいるにもかかわらず、紙媒体の教科書とデジタルの教科書の「併用」を支持する教員が66・5％から81・0％に増加したことが分かった。また、子どもたちの間でも自由記述などの意見を見ると、「併用」を求める声が多く出されている。アナログからデジタルへという社会の変化を認識しながらも、紙媒体の教科書に対する評価も捨てられないというのが子どもを含めた学校現場の本音のようだ。

デジタル教科書への理解は進むが

教員調査は15年10～11月にかけて、全国の小中学校（小学校1500人、中学校1000人）を対象に実施し、合計1107人から回答を得た。また、児童生徒調査は同年11月、小中学校各13校を対象に実施し、小5と中2の合計692人から回答を得た。同研究所は12年の調査と比較して、3年間での変化を取り上げている。なお、ここでいう「デジタル教科書」とは、文科省による検定教科書だけでなく、補助教材なども含めてデジタル教科書と呼称している。

まず教員調査の内容から見ると、パソコンの利用頻度が「3時間以上」という者の割合が、12年調査では45・1％だったものが、15年調査では56・7％に増加。また、電子黒板が全くない学校は23・5％から17・2％に減少しただけでなく、設置台数も「5～9台」が4・2％から8・7％へ、「10台以上」という学校も5・3％から10・8％に増えている。その一方で、学校のインターネット接続環境は、12年調査と15年調査の間に大きな差は見られなかった。

また、教員のデジタル教科書に対する意識を見ると「勉強への興味が増す」に「そう思う」（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）と答えた割合は、12年調査の77・8％から15年調査は89・3％に増え、「積極的に授業参加」も58・4％が78・9％に、「プレゼン能力が高まる」も67・6％が77・1％に増えている一方、「理解の個人差が広がる」は45・5％が34・2％に、「受け身になる」は31・8％が24・9％に、「思考力が低下する」も32・0％が24・2％に低下している。デジタル教科書への評価が高まり、デメリットなどを指摘する声が少なくなっている。

このように12年から15年の3年間で、学校現場や教員の仕事のICT化が進むと同時に、デジタル教科書に対する否定的・消極的な見方も減少していることがうかがえる。

ところが、教科書のデジタル化の是非について尋ねたところ「紙媒体の教科書は廃止してよい」という意見は、12年調査が3・7％、15年調査が3・1％と減少。同時に「紙媒体の教科書のほうがよい」という声も29・2％→15・6％に減少している。代わって「紙媒体とデジタル教科書併用」という意見が66・5％→81・0％に大きく増加している。電子黒板の導入など学校現場のICT化が進み、デジタル教科書への否定的・消極的な考え方も薄れているにもかかわらず、紙媒体の教科書とデジタル教科書の「併用」を支持する意見が大きく増えているということになる。

紙媒体とデジタルの「併用」を求める傾向は、児童生徒調査の自由記述の中でも見られる。特に、デジタル教科書を使った経験のある子どもほど、紙媒体の教科書との併用を求める傾向が高くなっているという。これについて同研究所は、「デジタルの長所と短所について十分に理解しており、結果として併用希望が多くなっているものと考えられる」と説明している。教員の場合も同じようなことが背景にあると思われる。

デジタル教科書の導入に対する慎重姿勢というよりも、学校現場のICT化が進み、デジタル教科書のメリット・デメリットなどの理解も深まりつつある中で、逆に紙媒体の教科書の良さが再評価されているということだろうか。いずれにしろ、紙媒体の教科書からデジタル教科書への全面的な切り替えは、教員も児童生徒も現在のところ望んでいないということは間違いないようだ。

意外と慎重な子どもたちの反応

一方、児童生徒調査の内容を見ると、12年調査から15年調査までの間で変化が大きいものとして、教科書の理解度が挙げられる。教科書の内容を「わかっている」（「ほとんどわかっている」と「かなりわかっている」の合計）と回答した子どもの割合は、12年調査が60・7％だったのに対して、15年調査では53・5％まで低下した。一方、「ゲームする」は61・6％→68・5％に、「スマホや携帯を使う」も36・6％→62・2％にそれぞれ増加している。特に、スマホなどの使用は3年間で25・6％も増加していることが注目される。

逆に12年当時と比べて減少した項目は「マンガ・雑誌を読む」が71・0％→65・3％、「マンガ・雑誌以外を読む」が63・7％→55・9％、「新聞を読む」が34・8％→26・7％などで、マンガを含めて活字を読むという行為が減少している。現在では、マンガでさえ読まないという活字離れが子どもたちの間で深刻化しているようだ。

デジタル機器の所有状況を見ると、「携帯（スマホ）」が29・3％から47・3％に増加、「パソコン・タブレット型端末」も15・0％から30・3％に増えており、特に、スマホなどの所有率の伸びが目立つ。さらに、パソコンやスマホなどを使ってしていることでは「ネットで調べる」が86・7％→91・9％、「メール」が58・9％→67・7％、「SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）」が21・6％→52・6％など。特にSNSを使用する小中学生の増加が際立っており、スマホの普及によるものと考えられる。

デジタル教科書の認知度を見ると、「使用経験あり」が4・3％から24・3％へと大きく増加している。逆に「まったく知らない」は55・2％から12・4％、「見たことあり」は40・5％から26・6％へとそれぞれ減少したほか、「聞いたことはある」（15年調査のみ）は36・1％となっている。同様に電子黒板についても、「授業を受けた経験がある」が69・1％から84・0％へと増えている。スマホの急激な普及とともに、デジタル教科書の存在、電子黒板での授業実施などは、この3年間のうちに子どもたちの間でも当たり前となりつつあるようだ。

また、家庭でパソコンやタブレット型端末を勉強以外で使用しているかどうかと、デジタル教科書への意識の関係を見ると、デジタル教科書で勉強への興味が増すと「とてもそう思う」子どものの割合は、使用している小学生では43・8％、中学生では36・0％、使用していない子どもでは小学生が39・1％、中学生が41・1％。また紙媒体の教科書の方がよいと「とても思う」という子どもの割合は、家庭でパソコンなどを使用している小学生で15・9％、中学生で22・8％、これに対して家庭で使用していない小学生では18・6％、中学生では9・4％だった。

家庭でのパソコンなどの使用経験のある小学生は、デジタル教科書に対して肯定的回答が目立つのに対して、中学生になるとパソコンなどの使用経験があるほどデジタル教科書の効果に懐疑的な傾向が表れ、紙媒体の教科書を評価する割合も高くなっている。中学生程度になると、情報機器の使用頻度がデジタル教科書などへの肯定的意識に必ずしもつながらないことを意味しており、今後のデジタル教科書などへの対応を考える上で興味深い。

この他、教員と児童生徒の意識の違いでは、教員の方が子どもよりもデジタル教科書などの効果を高く評価していることが分かった。例えば、デジタル教科書で「勉強への興味が増すか」では、「とてもそう思う」が中学校教員で22・0％、中学生で37・5％だったものの、「ややそう思う」は教員が64・6％、中学生が36・0％で、合計すると教員86・6％に対して中学生は73・5％となり、13・1％もの差がある。デジタル教科書について教員と子どもの間には意識に溝があるようだ。

（斎藤剛史＝教育ジャーナリスト）

教育支援サイト http://es.jiji.com